中間態の研究（I）
――ゴート語に対する予備的研究――

大　森　裕　實

A Study on Middle Voice, Part I: a preliminary research into Gothic

Yujitsu OHMORI

緒　言

日本の英語学（English Philology）の祖として知られる市河三喜（1886–1970）は[1]、英語の科学的研究を進め、現代英語をよく理解するためには、古英語（Old English）及び中英語（Middle English）の基礎的知識が不可欠であるとの信条に基づき、『古代中世英語初歩』（1935）を著わした――その後、松浪有（1924–95）により、同書は『古英語・中英語初歩』（1986）に改訂された。それに先立って、英語学徒が修得すべき古典語知識への誘い『ラテン・ギリシア語初歩』（1930）も同氏は公刊したが、その副題に「英學生の爲め」と記載されていることからも、その意図するところは明らかである。

而して、本稿では、英語学徒であれば避けては通れないゴート語（Gothic）に関する基礎知識を記述すると同時に、現在の英語には *hight* という古風な動詞の他には、その residue が看取されない、ゴート語がもつ特徴的な中間態（middle voice）について、また、それと関連の深い再帰態（reflexive voice）について考察し、英語学研究の一助とする。

1　ゴート語研究の基礎知識

1-1　ゴート語の輪郭

比較言語学の教えるところによれば、ゴート語が属すると考えられるゲルマン語派は、インド–イラン語派、ギリシア語派、イタリック語派（ロ

マンス諸語）、アルバニア語派、スラブ語派、ケルト語派、バルト語派、ヒッタイト語、トカラ語を直系に含むインド・ヨーロッパ語族（Indo-European Language Family）において、枢要な地位を占める。

さらに詳しく、このゲルマン語派を観察すると、次の4つの語群に分類することができる（高橋 1982: 3–4）。

① 北欧ゲルマン語――古ノルド語（Old Norse）に起源をもつ、（西地域）ノルウェー語、アイスランド語、フェーロー語；（東地域）スウェーデン語、グトランド語、デンマーク語。

② 北海ゲルマン語――アングロサクソン語（英語の母体）、フリージア語、サクソン語（後の低地ドイツ語）。

③ 中欧ゲルマン語――低部フランク語（オランダ語の母体）、中部フランク語、高地ドイツ語（高部フランク語、バイエルン語、アレマン語、ランゴバルド語。

④ 南欧ゲルマン語――ゴート語、ルギ語、ブルグンド語、ゲピード語、ヴァンダル語（これら諸語の間に差異はほとんどない）。

このように、言語学的には、ゴート語は南欧ゲルマン語群に分類されるが、通常、地理的には、東ゲルマン部族に属するゴート人の言語と見なされる。このゴート人を表わす *Gutōs という名前が示唆するところから、北欧の Gauts（OE Gēatas）と同根であり、雄の獣神に対する信仰を共有した民族であると考えられる（『新英語学辞典』1982: 503）。歴史的には、ゴート人は東西に分派し、東ゴート族（Ostrogoths）は紀元後4世紀頃にはウクライナ地方に建国し、5世紀中葉にはイタリアを支配下に治めたが、6世紀中葉には滅亡した。一方、西ゴート族（Visigoths）はダキア（現在のルーマニア）で栄え、紀元後4世紀頃にはキリスト教の伝道を受けた――後述する司教ウルフィラ（Ulfilas/Wulfila）が聖書を翻訳したのはこの時期に当たる（AD 341–48）。その後、5世紀には南フランス及びスペイン地方に建国したが、8世紀になるとサラセン帝国によって滅ぼされた。従って、現在では死語ということになる。しかし、ゴート語がゲルマン語最古の方言の姿を留めていることから、英語学研究においても、古英語（OE）以前の様相を窺う上で、参考になる点が多いことを強調しておかねばならない。

1-2　ゴート語の文献資料（現存テクスト）

ここでは、『新英語学辞典』(1982: 504–05) 及び『ゴート語の聖書』(1989: 14–16）の記述を基に簡略にまとめ直して、参考に附す。

a）Codex Argenteus［CA: 銀文字写本］（Uppsala 大学図書館所蔵）——この名称は、紫色の羊皮紙に銀字金字で記されていることに由来する。西ゴート族の司教（Ulfilas/Wulfila, 311–82）が翻訳した新約聖書の四福音書336葉の内、188葉が残存する（最後の１葉は1970–71年に旧西ドイツ Speyer 寺院で発見されたもの）。マタイ伝（Matthews)、ヨハネ伝(John)、ルカ伝（Luke)、マルコ伝（Mark）の順に配列されている（西方系配列)。現存写本の中で最大級にして、言語学的に極めて重要な文献資料。

b）Codex Ambrosiani［Ambr: アンブロシア写本］(ミラノ Ambrosian 図書館所蔵）——1817年に枢機卿マイ（Angelo Mai）によって発見された写本で、５つの断片群から成る。① Codex A（102葉）（全パウロ書簡の断片）；② Codex B（77葉）（パウロ書簡の断片）；③ Codex C（２葉）(Matt. 25–27の断片）；④ Codex D（３葉）（Neh. 5–7の断片）；⑤ Codex E（８葉）（内３葉は Vatican 所蔵)。

c）Codex Caroline［Car: カール写本］（旧西ドイツ Wolfenbüttel 図書館所蔵）——この名称は、Braunschweig の Karl 公爵に因む。Rom 11–15の断片、ラテン語との対訳を特徴とする重記写本（Palimpsest）４葉[2)]。

d）Codex Gissensis［Giss: ギーセン写本］（1907–45年ギーセン図書館所蔵；現在は消失）——Luke 23–24の断片、ラテン語との対訳を特徴とする。

e）Codex Taurinensis［Tau: トリノ写本］（Torino 大学図書館所蔵）——Gal と Kol の断片４葉の重記写本で、傷みが激しい。元来は、Ambr., Codex A に属していた。

※ウルフィラの聖書翻訳文献資料の他に、証書（551年頃)、ルーン文字（runes）ゴート語資料（槍先の銘、金の腕輪の銘）などがある。

1-3　ゴート語の基礎的文法書及び語源辞典10選

(1)　Holthausen, F. (1934) *Gotisches etymologisches Wörterbuch*. Carl Winter.

(2) Jordan, Richard (1968) *Handbuch der mittelenglischen Grammatik*. Carl Winter.
(3) Krahe, H. (1948) *Gotische Texte*. Carl Winter.
(4) Mossé, F. (1942) *Manuel de la langue Gotique*. Aubier Montaigne.
(5) Streitberg, W. (1920) *Gotisches Elementarbuch*. Carl Winter.
(6) Wright, J. (1954[2]) *Grammar of the Gothic Language*. [with a supplement to the grammar by O. L. Sayce] Oxford Clarendon Press.
(7) 高橋輝和（1982）『ゴート語入門』クロノス.
(8) 千種眞一（1989）『ゴート語の聖書』大学書林.
(9) Feist, S. (1923) *Etymologisches Wörterbuch der Gotischen Sprache*. Max Niemeyer. [The 3rd edition was published by E. J. Brill in 1939.]
(10) Lehmann, W. (1986) *A Gothic Etymological Dictionary*. E. J. Brill.

1-4　ゴート語のテキスト註解（入門）

上掲 (7)(8) で扱われていない箇所を取り出して、ゴート語読解の例を示す。この場合、本文は入手が容易な Joseph Wright 著 *Grammar of the Gothic Language* に収録された「マルコによる福音書」から引用する。

Chap. 8: 1

In	jáináim	þan	dagam	aftra	at	filu	managái	managein	wisandein	jah	ni
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

habandam	ƕa	matidēdeina,	atháitands	sipōnjans	qaþuh	du	im:
13	14	15	16	17	18	19	20

1. ‘in’ prep. [with dative]（この場合）
2. ‘those’ *jáins* dem. pl. dat（adj. の変化）
3. ‘then’ dem.（文頭に現われない）
4. ‘days’ *dags* sm. pl. dat.
5. ‘again’ adv. [OE æfter]
6. ‘at/with’ prep.[with dative]（この場合）
   ⇒ absolute dative（絶対／遊離与格）を導く指標（marker）として機能。

7. ‘much/great’ neut. adj.（副詞的用法）
8. ‘many’ *managS* f. sg. dat.（adj. の変化）
9. ‘crowd’ *managei* wf. sg. dat.
10. ‘being’ *wisan-s* f. sg. dat.（現在分詞の adj. の変化形）
11. ‘and’ conjunction
12. ‘not’ adv. neg.
13. ‘having’ *haband-s* m/n. pl. dat.（現在分詞の adj. の変化形）
14. ‘what’ *huas* n. sg. acc.
15. ‘eat’ matijan wv.1. 3. pl. pret. subj.（⇒ they would eat）
16. ‘calling to’ *atháitan* sv. 7. pres. participle（附帯状況を表わす現在分詞）
17. ‘disciples’ *sipōneis* sm. pl. acc.
18. ‘said’ *qiþan* sv 5. 3. sg. pret.（⇒ Jesus said）
19. ‘to’ prep. [with dative]
20. ‘them’ pron. m. pl. dat.

‘In those dayes, the multitude being very great, and hauing nothing to eat, Iesus called his disciples vnto him, & saith vnto them,’ (*A.V.*, 1611)

2　ゴート語にみる中間態[3)]

2-1　中間受動態（medio-passive）

英語に *hight* ‘to be called’ という古風な動詞があることは人口に膾炙するところだが、この動詞の使用を現代英語（Present-day English）で見かけることは稀である。しかし、中英語（ME）を代表するチョーサーの『カンタベリー物語』において、また、初期近代英語（E.Mod.E）で表現された『ヨーク聖史劇』やマロリーの『アーサー王の死』においても看取されることに気づく者は少なくない。

eg. 1　In Southwerk at this gentil hostelrye
　　That *highte* the Tabard, faste by the Belle
　　‘at this excellent inn in Southwark, which *was called* the Tabard, close by the Bell　(*Canterebury Tales*: GP, 718–19)

eg. 2　What *hytist* thou?
　　'What *are* you *called*?'　　(*York Play*, 26: 225)

eg. 3　What *heteth* your lady and where dwelleth she?
　　'What *is* your lady *called* and where does she dwell?'
　　(*Morte d'Arthur*, 7: 2)

これに関連して、後期近代英語（L.Mod.E）の18世紀を代表するジョンソン博士の編んだ『英語辞典』（初版1755／第４版1773）では、スペンサー及びドライデンの作品から引用する形で、この動詞は「受動の意味をもって過去時制で使われる」と解説している。

OED 第２版で *hight* の項を調べると、archaic（古語）表示の後、「ゲルマン祖語に起源をもち、語形態としては、OE. *hāt-an*（過去形 *heht*）/ OFris. *hêta* / OS. *hêtan* / OHG. *heizzan* / ON. *heita* / Goth. *haitan*（過去形 *haihait*）などがあり、古ゲルマン語の中間受動態（medio-passive）を表わす動詞形で、英語ではこれが唯一、中間受動態の痕跡を留めるものである」との解説を確認することができる。

実際のところ、古英語訳新約聖書（*West Saxon Gospels*）「マタイによる福音書」の中で、イエスがナザレで拒否される場面において「（この人は大工の子ではないか）また、彼の母はマリアというのではないか」という箇所に、次のような表現を見出だすことができる。ラテン語訳聖書（*Vulgata*）では、dīcō の直説法現在受動相 *dīcitur* で表現される。

eg. 4　hū ne *hātte* hys mōdor Maria　(OE)
　　'Nōnne māter ēius *dīcitur* Maria' (Latin)　　(*Matthew*, 13: 55)

しかし、OED の解説にもあるように、このような動詞屈折形による受動態表現は古英語でも極めて稀であり、この *hātte* を除いて他は迂言形式による受動態表現（wesan/weorþan + p. p.）をとる。

而して、ここで注目した *hight* という動詞は、その起源を古くゴート語にまで遡ることができるため、ゲルマン語が本来備えていた中間態（middle voice）の residue ではないかと想定する手懸りを提供してくれるという点で、極めて貴重な存在である。

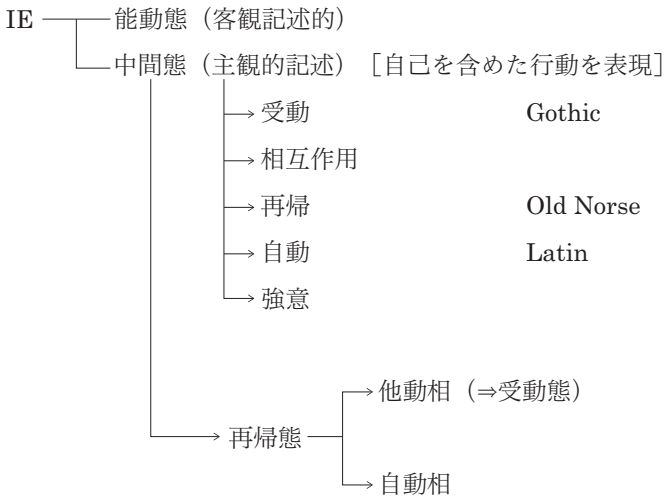
OE.	hātte (hātan) [sg.] / hātton [pl.]			
ON.	heite / heita			
Goth.	háitan háitada [3 sg. 'is called'] / haíháit [pl.]			
	medio-passive		<ind.>	<subj.>
		sing. 1	haitada	haitaidau
		2	haitaza	haitaizau
		3	haitada	haitaidau
		plur. 1–3	haitanda	haitaindau

ここから判明することは、ゴート語の *háitan* 'call' という動詞の中間受動態を表わす重複完了形（過去形）の *haíháit* の一部が残ったものが、英語の *hight* という語形に至っているという事実である。本来、過去形の幹母音が、中英語において、現在形の幹母音としても転用される事情については OED の説明に詳しいが、法助動詞の must なども過去形からの転用であることを考慮すると[4)]、それほど想像に難い言語現象でもない。

結局、*hight* という動詞は、ゲルマン祖語に存在したと考えられる中間受動態へ、さらには、古く印欧語に存在したと推定される中間態へと考察を進める道標的役割を果たしているということができる。

2-2　再帰態（reflexive）

ゴート語に存在する中間受動態（medio-passive）、ラテン語やケルト語に存在する能相欠如動詞（deponent verb）、古ノルド語（古アイスランド語）の再帰動詞（reflexive verb）などは、いずれも印欧語に元来存在したと推定される中間態にその起源を遡ることができると考えられる。換言すれば、印欧祖語においては、能動態と中間態の二態が存在し、いわゆる受動態は後代の発達であると考えられるので、これらの関係を図示すれば、次のようになる。



上掲の図式における中間態と再帰態の関係性をよく表わすものに、ギリシア語文法における terminology がある。ギリシア語文法では、中間態のことを再帰態と呼んでいるが、それは、①動作が直接的に動作主に再帰する場合、②動作が間接的に動作主に再帰する場合、③動作が動作主の負担において生じる場合に中間態が使用されるという機能的観点からであろう。加えて、ギリシア語では、アオリストと未来形を除けば、受動態の屈折形態と区別されることなく中間態が使用される特徴がある。特に、上で指摘した①動作主への直接的再帰機能は、他動詞の自動詞的機能への転換現象につながる興味深い言語事実を提示している。

eg. *-μαι*	*λουωομαι*	(I wash myself	＞	I bathe)
	πειθομαι	(I persuade myself	＞	I obey)
	παυωομαι	(I stop myself	＞	I cease)

確かに、中間態と受動態の動詞屈折形態の融合（syncretism）[5]は認められるが、ギリシア語には再帰代名詞（*εμαυτοῦ*）の他に、強意代名詞（*αὐτος*）及び相互代名詞（*ἀλληλων*）が存在することを考慮すると、他の言語に比べて、全体的に機能融合の程度は大きくはないといってよい。それとは対照的に、ゲルマン語の場合、代名詞の数もいくつかに収斂して、

機能融合の程度が大きくなるため、ゲルマン語では、再帰態の表わす意味が複雑になるのであろう。

本稿が注目するゴート語の場合、中間態から派生したと考えられる動詞語形態を伴なう再帰態は、その文献資料から判断する限り、再帰代名詞や人称代名詞を再帰的に使用した「再帰相表現」に取って代わられたと判断される。以下に人称代名詞と再帰代名詞の変化表を掲げて、参考に附す。

〈人称代名詞〉

		(nom)	(acc)	(gen)	(dat)
sing. 1		ik	mik	meina	mis
sing. 2		þu	þuk	þeina	þus
sing. 3	m.	is	ina	is	imma
	n.	ita	ita	is	imma
	f.	si	ija	izōs	izái

〈再帰代名詞〉

sing./plur. 3	*sik*	*seina*	*sis*

ここで特記すべき点は、印欧語における再帰代名詞というものは、本質的には１・２・３人称単複いずれの場合にも使用することができた――例えば、梵語（Sanskrit）にはこの用法が継承されているのだが、ゲルマン語の場合には、ゲルマン祖語の段階で１人称及び２人称では人称代名詞が再帰的に使われるようになり、ゴート語では、３人称に限定されるという特徴を示す。次の例は、その辺りの事情を明らかにするものといえる。

eg.	gavandja	*mik*		I turn myself towards/ I return
	skama	*mik*		I am ashamed
	ōg	*mis*	*ōgjan (wv.1)	I fear
	gaqimand	*sik*		they gather

このような特色をもつゴート語の再帰代名詞の顕著な用法について、近接する節に現われる興味深い事例をゴート語訳新約聖書「マルコによる福音書」（第３章―聖霊を汚す者）に見出だすことができる。当該箇所を引用して、それらの用法を確認することにする。

Chap.3:20

Jah atiddjēdun in gard, jah gaïddja *sik* nmanagei, swaswē ni mahtēdun nih hláif matjan.　'the crowd went together'

※下線部は、原典ギリシア語 *συνεχεται*（中間態）からの翻訳で、ギリシア語中間態に再帰相表現を充てたもの。

'And the multitude commeth together againe, so that they could not so much as eate bread.'（*AV* 訳）

Chap.3:24

Jah jabái þiudangardi wiþra *sik* gadáiljada, ni mag standan sō þiudangardi jáina.　'is divided against itself'

※下線部では、動詞が gadailjan（wv.1）3. sing. ind. passive の語形態をしており、前置詞の目的語として再帰代名詞（3人称単数）を入れたもの。

'And if a kingdome be diuided against it selfe, that kingdome cannot stand.'（*AV* 訳）

Chap.3:26

Jah jabái Satana usstōþ ana *sik silban* jah gadáiliþs warþ, ni mag gastandan, ak andi habáiþ. 'stood up against itself'

※下線部では、sik に silba 'self' が結合した強意形を前置詞の目的語とした再帰強調表現。

'And if Satan rise vp against himself, and be diuided, hee cannot stand, but hath an end.'（*AV* 訳）

結　言

ゴート語について考察する時、その拠り所とする現存文献資料のほとんどが西ゴート族出身の司教ウルフィラの手になるギリシア語新約聖書からの翻訳聖書であることに、十分な注意を払っておかねばならない。而して、ゴート語聖書を瞥見しただけでも、原典のギリシア語の影響に相違ないと思われる表現法の存在に気づかされる――これが Slave Translation と揶揄される所以である。しかしながら、こうした限られた資料からであって

も、古英語以前のゲルマン語の音韻組織と変化に関して示唆するところを、また、本稿で採り上げた中間態のような動詞が担う文法範疇とその概念に関して示唆するところを観察することができる。

印欧語が元来備えていたと考えられる中間態がどのような経緯を辿ってゲルマン語に継承され、それが古英語を経て、現代英語の文法知識にまで至っているかを探究する際に、道標的役割を果たしてくれる重要な言語の一つが（現在では死語となった）ゴート語であり、そこに対する洞察が英語の科学的研究にとって不可欠であることは言を俟たない。

註

1）市河三喜（1886–1970）については、『英語学人名辞典』（1995）の他、寺澤芳雄「市河三喜と日本の英学」『明治・大正の学者たち』（1978）に詳しい。

2）重記写本（Palimpsest/ codex rescriptus）とは、先に書いた文字を削り去って、その上に新たに文字を書いた羊皮紙写本のこと（千種 1989: 15）。

3）本稿第 2 節の記述には、部分的に大森（1996）と重複する箇所があることをあらかじめ断っておく。

4）法助動詞（modal auxiliary）must は、本来は欠如動詞（defective verb）の mōt ‘may’ の過去形 mōste に由来する。ought も同様で、これらの欠如動詞は、過去現在動詞（preterite-present verb）とも呼ばれる。また、法助動詞の形と意味の変遷については、小野茂『英語法助動詞の発達』（1969）に詳しい。

5）機能融合（syncretism）とは、文法上異なった機能を有する複数の語形が音変化等の原因によって、融合し、1 つの語形で前時代の異なった語形の機能を果たす言語史上の現象をいう――「ラテン語の与格は印欧祖語の処格と助格の機能を併合したものである」や「古英語の与格は古い時代の助格の機能を兼ね備えている」と表現している時には、このことを意味している。現代英語における、直説法（叙実法）と接続法（叙想法）の関係も同様である。語形態が簡素化される反面、1 つの語形にいくつかの文法機能を担わせることになるため、そこから意味の曖昧性が生じる原因にもなる。

参考文献

市河三喜［編］（1953）『英語学辞典［増補版］』東京：研究社.

市河三喜（1935）『古代中世英語初歩』東京：研究社.（改訂新版は松浪有と

の共著の形で『古英語・中英語初歩』研究社，1986）
市河三喜（1930）『ラテン・ギリシア語初歩』東京：研究社.
大塚高信・中島文雄［編］（1982）『新英語学辞典』東京：研究社.
大森裕實（1996）「ゲルマン語における中間再帰態構造―ゴート語と古アイスランド語の *sik を中心に―」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第28号.
大森裕實（1999）「中間再帰態構造と自動詞・他動詞の転換現象」『近代英語研究』（近代英語協会）第15号.
吉岡治郎（1968）「ゴート語前置詞 du の用法について」『英米文学』（帝塚山短期大学）第13号.
吉岡治郎（1972）「ゴート語前置詞 us の用法について」『親和女子大学研究論叢』第５号.
吉岡治郎（1973）「ゴート語前置詞 at の用法について」『親和女子大学研究論叢』第６号.
吉岡治郎（1976）「ゴート語前置詞 ana の用法について」『蛭沼寿雄教授還暦記念論文集』（大阪言語研究会）Linguistic Studies Series, No. 1.
吉岡治郎（1981）「聖書のゴート語訳へのラテン語訳の影響：前置詞の場合」『国際言語科学研究所所報』（京都産業大学）第２号.